

殿という祭祀場がある。またこの集落は三家が村立てをしたと伝承されている。こうした拝所数と村落創始家の数から、稲福は三つの祭祀集団が統合されたと考えられている。当遺跡群は集落の拝所付近に形成され、年代的にも稲福集落と連続するのでその初期集落跡と考えられる。各拝所と遺跡の位置関係は、稲福集落の創始家や稲福殿がある一帯が稲福殿遺跡、上御願一帯が上御願遺跡、仲村御嶽一帯が仲村御嶽遺跡である。

一九六九―七四年(昭和四四―四九年)にかけて稲福遺跡群と稲福集落の歴史的關係を調べるための考古学的調査が行われた。その結果、上御願遺跡は三一―四世紀の集落跡、稲福殿遺跡は四一―五世紀の集落跡であることが判明し、仲村御嶽遺跡も採集された遺物から一四世紀の集落跡と推定されている。一三世紀に上御願遺跡の集落が形成され、一四世紀には稲福殿遺跡と仲村御嶽遺跡の各居住地が登場して三つの居住地から構成された集落となったが、一四世紀後半頃に稲福殿遺跡に集落統合され、さらに一五世紀には集落編成されて沖繩戦前の稲福集落の原型ができたと考えられる。稲福遺跡群の中心的遺跡である上御願遺跡は、大型建物と広場を中心に住居・倉庫・鍛冶場・祭祀場があり、稲福遺跡群の首長層の居住区と考えられている。稲福殿遺跡の発掘では一四世紀の屋敷跡、一五世紀の倉庫跡、一六―二〇世紀の石組祭祀場遺構が出土している。

上御願遺跡 ④大里村大城

稲福集落の御嶽である上御願(山グスクとも)一帯にある三一―四世紀の集落遺跡。標高約一八〇メートルの丘陵上に分布する稲福遺跡群の中心的遺跡で、丘陵頂部から南斜面にかけて約一〇〇〇平方メートル余の範囲に形成されている。一九七―七四年(昭和四六―四九年)と八一年に発掘調査が行われた。石積みなどの防御施設は確認されていないが、居住地を囲む堀などの防御施設があることが推定される。これまでに稲福遺跡群の中心部を調査している。

分が発掘され、その内部構成が明らかになっている。集落の最上位に建つ大型建物とこれに相對する一〇〇平方メートルほどの広場を中心に、周辺に住居・倉庫・祭祀場・鍛冶場がある。おもな出土遺物は多量の輸入陶磁器、土器、炭化米・麦、獣骨・貝殻などの日常生活遺物のほかに、鉄鎌・釣針・鉄斧などの生産用具、勾玉や玉などの祭祀具、鉄鏝、刀の鏝、鏝の留具などの武器・武具類、鏡や調度品の飾金具など多彩な内容である。こうした遺物・遺構から上御願集落は大型建物に居住して立派な調度品をもち、鎧で武装した稲福遺跡群の首長の人物や祭祀をつかさどる司祭者の人物のほかに、農業・漁労・鍛冶などの生産労働に従事する労働者などからなる数家族規模の集落と考えられる。「おもろさうし」には、稲福に立派な建物が建てられたこと(巻一七の四七、テダ(太)とよばれて畏敬された人物に、周辺の集落から鎧をまとい部下を引連れた者が拜謁する情景が語られている(巻一七の四五)。この集落は大型建物と広場、テダとよばれる首長の人物の居住を重視すると、首長とその一族が居住する「居館」とよぶのが妥当であろう。

真境名村 ④大里村大城

大里間切の東部に位置し、南は稲福村、北は西原村、東は佐敷間切小谷村(現佐敷町)、絵図郷村帳・琉球国高究帳に島添大里間切「まぎげな村」とあり、「琉球国由来記」には大里間切真境名村とみえる。高究帳によると高頭四石余、うち田三石余(うち永代荒地五斗余・畠八石余。間切集成図には西原村の南に並んで描かれ、集落内に樋川がみえる。馬場長堂原馬場が集落の後方近くにある。当村を領した地頭職には康熙一三年(一六七四)に翁氏六世翁宗親親雲上盛武が任じられ(翁姓永山家系譜、乾隆二年(一七五七)に向氏真境名親雲上朝孝がいた(中山世譜 附巻)。磨藩の頃は真境名盛福がいた(家譜資料「那覇市史」など)。明治六年(一八七三)の真境名親雲上の家系図が成り立っている。当村の作持は九石余(高究帳に「真境名親雲上」の記述がある。明治六年(一八七三)の真境名親雲上の家系図が成り立っている。当村の作持は九石余(高究帳に「真境名親雲上」の記述がある。)

由来記によると高宮城ノロの崇所として真境名之嶽・大瀬森があり、年中祭祀として真境名之殿で稲二祭が行われ、地頭から供物が出された。一八八〇年の戸数五二・人口二二四(真統計概表。一九〇三年稲福村とともに大城村に合併)。

与那原町 面積四四五平方キロ

沖繩島南部の東海岸、島尻郡の北端に位置する。南は佐敷町・大里村、西は南風原町、北は中頭郡西原町に接し、東は中城湾に面する。地形は中城ドームによって中城湾を取巻くように発達した急崖に囲まれる。南に隣接する大里村の大里グスク(標高一五五・二メートル)がある。台地から延びる雨乞森(標高一三三・六メートル)と北西にそびえる運玉森(標高一五八・一メートル)の間にあつて、中城湾に面して海岸低地帯が広がる。与那原海岸は一九九六年(平成八年)からの中城湾港マリン・タウン・プロジェクトによって埋立が進行し、新しい字の東浜が成立。地質は大半が第三紀島尻層群の泥岩・砂岩からなり、丘陵の頂部は琉球石灰岩が覆っている。那覇を發した国道三二九号が島尻をほぼ一周する国道三三三号と与那原交差点で合流し、名護市に向け北上する。同交差点の交通渋滞解消を図るため同三二九号と与那原バイパス事業が進められている。ほかに主要地方道糸満―与那原線(県道七七号線)や一般県道二四〇号線(南風原―与那原線)が各地を結ぶ。

〔古琉球―近世〕「中山世譜」によれば、尚巴志は王となる前の佐敷の小按司とよばれていた頃、与那原に貿易を求めて往来する異国船から鉄を買ひ、これで農具を造って百姓に与えたという。島添大里間切、のちに大里間切に所属し、町域には四村があつた。乾隆元年(一七三六)には大里間切番所が南風原村(現大里村)から与那原村に移転した。

日本史地名大系48巻 沖繩県の地名 (2007)

与那原町 ④大里村大城

とあり、九六六年からは島尻郡に所属。一九〇七年勅令第四五号の施行により〇八年一月一日には大里間切を大里村と改称。同年四月一日大里村に沖繩県及島嶼町村制を施行。一八八六年首里―与那原間を結んだ与那原街道が整備され、一九〇八年与那原―西原街道が竣工し、一四年(大正三年)には県営鉄道与那原線が開通し、一五年糸満―与那原街道全線が竣工した。大里村からの分離についての議論が二八年(昭和三年)頃からもち上がり、四四年には町制施行が実現しそうになったが、第二次世界大戦のため中断され、沖繩戦後再び機運が盛上り、四九年には与那原―上与那原・板良敷の三字を大里村から分離して町制を施行、町名を与那原町とした。文化財は三津武嶽・久葉堂・久葉塘・東名大王・宗之壇・久茂久地があり、大里・佐敷・知念・玉城の聖地を巡拝する東御廻り(アガリウマイ)のコースの御殿山や親川がある。約四〇〇年の伝統をもつといわれる与那原大綱引が旧暦の六月に与那原まつりのメインとして行われる。

とあり、「琉球国由来記」には大里間切と与那原村とみえる。高究帳によると高頭四八〇石余、うち田三石余(うち永代荒地二五石余・畠一五石余。近隣の上与那原村や大見武村の高も含むものと思われる。惣地頭が与那原を家名とする向姓辺土名家譜など)。間切集成図には、上与那原村とひと続きに他村とは比較にならないほどの大村として描かれている。首里からの道筋が南風原間切を経て西側の大見武村を通り、親川の場所に出て西原間切から海岸沿いに南下した道筋と合流し、本番所に至る。集落内には親川とは別の井もある。西原間切に向かう道沿いに御殿山がある。与那原の浜は与那古浜と記され、津口には大船懸けするところがある。西原間切との海方は切は卯下小間右に当たる。古くから交通・交易が盛んであったといわれ、「球陽」尚巴志元年(一四三三)条によると、佐敷の小按司とよばれた尚巴志が与那原で異国商船から鉄を買ひ、百姓に与えて農具を作らせたという。乾隆元年(一七三六)には南風原村(現大里村)の間切番所が当村に移されている(同書尚敬王三四年条。同五六年には湊の海面が三丈五尺ほど上がるという潮水異常が発生した(同書尚穆王四〇年条。ほかにも諸座公用の雑物などを装載した船の入津の記事がある(同書尚瀛王二年条など)。

が あつた。前掲由来記によると与那原ノロの崇所として浜ノ御殿・オヤガワ・アキリ嶽・友盛ノ御嶽イベ・上与那原ノ嶽があり、年中祭祀として上与那原ノ嶽で三月・八月に四度御物参の折願、アキリノ殿二つ、シキヤコンノ殿で稲二祭が行われた。一八八〇年(明治一三年)ののろくもい役傳によれば与那原ののろくもい作持は米七斗余・雑石五斗余、現収高米三斗余。同年の戸数四九九・人口二千四六二(真統計概表。一九〇三年大見武村を合併し、同年の戸数七五八・人口四千六六七、うち土族四四七戸・二千三六八人。反別二四三町三反余、うち田八反余・畑一八七町余・宅地一九町一反余(真統計概表)。

与那原町 ④大里村大城

とあり、「琉球国由来記」には大里間切と与那原村とみえる。高究帳によると高頭四八〇石余、うち田三石余(うち永代荒地二五石余・畠一五石余。近隣の上与那原村や大見武村の高も含むものと思われる。惣地頭が与那原を家名とする向姓辺土名家譜など)。間切集成図には、上与那原村とひと続きに他村とは比較にならないほどの大村として描かれている。首里からの道筋が南風原間切を経て西側の大見武村を通り、親川の場所に出て西原間切から海岸沿いに南下した道筋と合流し、本番所に至る。集落内には親川とは別の井もある。西原間切に向かう道沿いに御殿山がある。与那原の浜は与那古浜と記され、津口には大船懸けするところがある。西原間切との海方は切は卯下小間右に当たる。古くから交通・交易が盛んであったといわれ、「球陽」尚巴志元年(一四三三)条によると、佐敷の小按司とよばれた尚巴志が与那原で異国商船から鉄を買ひ、百姓に与えて農具を作らせたという。乾隆元年(一七三六)には南風原村(現大里村)の間切番所が当村に移されている(同書尚敬王三四年条。同五六年には湊の海面が三丈五尺ほど上がるという潮水異常が発生した(同書尚穆王四〇年条。ほかにも諸座公用の雑物などを装載した船の入津の記事がある(同書尚瀛王二年条など)。

日本史地名大系48巻 沖繩県の地名 (2007)

口鳴響む大君／やちよ〔かけてとよまきに〕(八千代に...)

親川 与那原町与那原 与那原の新島にある泉で与那原親川が正式な名称...

三津武御嶽 与那原町与那原 運玉森の東側中腹にある御嶽。「おもろさうし」巻一...

見武村と西原間切安室村(現西原町)の境界にある聖域で...

戸の近くで遊んでいると、天から二つの光の輪が下りて...

幅三メートルほどの石造の祠が建てられている。

大見武村 与那原町与那原 与那原村の西にある。ウフンチャキ村とよぶ。...

上与那原村 与那原町上与那原 北から東にかけて与那原村、西は南風原間切と那覇村...

板良敷村 与那原町板良敷 与那原村の東に位置する。北から東にかけて海に面し...

佐敷町 面積一〇・六〇平方キロ 沖繩島南部の東側に位置し、北部は中城湾に臨む。...

南風原間切を経て当村の前を通り、与那原村に至る道筋...

大見武屋敷 大見武大屋敷子幸通が在る(眞姓久高家家譜。前掲由...

運玉森 与那原町と西原町の境界に位置する標高一五八・一メ...

大見武村とみえる。高究帳では与那原村の高頭四八〇石...

大見武村とみえる。高究帳では与那原村の高頭四八〇石...

大見武村とみえる。高究帳では与那原村の高頭四八〇石...